♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

未来へ

♪♪♪

松岡園子

「ゆりちゃん、おはよ」

美保ちゃんの声で目が覚めた。

「もうすぐ先生、くるでぇ」

ゆりは一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなった。枕にしていた手の甲の下にある机から、かすかなぬくもりを感じる。

「美保ぉ、ちゃんと勉強しろよー」

笑い声とともに2年生が何人か教室の横を通り過ぎた。美保ちゃんの「うーん」という声が教室に響く。美保ちゃんはゆりよりも1つ年上の同級生だ。1つしか変わらないのに、すごくお姉さんに見える。茶色い髪も、大きな輪っかのピアスも、ピンク色の目元もゆりとは縁遠いものだ。美保ちゃんは1年生とあまり話さないから、この高校に入学してから8カ月余り経っているのに、ゆりともこれまでに挨拶を交わすぐらいなものだった。きっと、ゆりのことも子供っぽく見えているんだろうと思っていた。でも、昨日の体育の教室移動で一緒になった美保ちゃんに、ゆりが仕事の話をすると、お好み焼き屋さんで住み込みをしながら働いていると教えてくれた。中学を卒業してから入学した看護学校をやめて、今の生活を選んだことも。

「お金を貯めて、自分のやりたいこと見つけて、それに向かっていくねん」

そう話す美保ちゃんの目の奥で、光が広がったように見えた。

「私のお母さんは、病気やねん」

ゆりの口から母・夏子の話が出た。友達に話しても暗くなるだけだし、きっとわからないだろうと思って話さないことがほとんどなのに。気がつくと、これまでのことを話し続けていた。母・夏子が独り言を言って、まともに話もできなくなったのは、つい3年ほど前、祖母が亡くなって 2 人暮らしになった頃のことだ。それまでしていた塾の仕事も、家のこと

もできなくなってしまった。親戚の人達はそんな夏子と中学 1 年生のゆりが 2 人で暮らすことはできないと考え、自分たちの家に引き取った。しかしその後、ゆりは児童養護施設へ入所することが決まっており、夏子と離れて暮らすことになった。どうしても納得のいかなかったゆりは施設を数回抜け出し、後の話し合いの末、無理やり夏子と神戸の家に戻ってきた。そうして夏子と一緒に暮らすことができるようになったが、家事も話もできない夏子との暮らしは大変なことも多かった。なんとか中学 3 年間を乗り切ることができたのは、近所の人や友達の家族が手助けしてくれたおかげだ。卒業後の進路は、働きながら定時制高校へ行く道を選んだ。夏子は仕事をしていないし、早く働いた方が自由になれると考えたから。

「私も施設にいたよ」

「え……嫌じゃなかった？」

「わからへん、ずっとそこで育ったから。私は未来にどうしたいかしか考えてなかったし、これからもそう」

美保ちゃんの家族は事情があって四国に住んでいるそうだ。困ったことがあったら、誰に相談するんだろう。1 人で何でも決めてきたのだろうか。

「美保ちゃん、仕事でしんどい時とか落ち込むことってある？」

「あるよ。誰でもあるんちゃう？」

「私な、仕事でうまくいかへん時とか、気分が下がって、家でもまだ落ち込んでしまう時があるねん」

ゆりは昼間の調理の仕事中にお客さんの注文を聞き間違えて、作り直しになってしまったことを、ずっとお腹のあたりに抱えていた。学校に来ても、それが離れなかった。お客さんの三角になった目が、まぶたの裏に浮かぶ。おでこの辺りが熱くなる。

「誰でもあるよ。でも、〝あたしってあかんねんやぁ〟って自分を責めることないと思うわ。ダメやダメやって思っても、もう終わったことやし、そんなん考えとったら余計ダメになるって。自分を信じて、次のこと、未来のことを考えていかな」

そうして自分の悩みも、自分で片付けてしまいそうな美保ちゃんは、ぐんとお姉さんに見えた。美保ちゃんの口から出てくる言葉は海のようだった。ゆりはそこに漂って浮いているだけで、包まれているような気分になった。ただの思いつきや、その場しのぎで発している言葉ではない。それまで肩を並べて階段を下りていた美保ちゃんが 2、3 段、先に駆け下りた。

「ゆり、がんばれーっ」

美保ちゃんの足が止まって振り返る。踊り場で話をしていた先生達の視線を感じる。

「って、心の中で叫んでみたら？」

美保ちゃんは、ははははっと笑って、また階段を下り始めた。ゆりも 1 段ずつ下りていく。

「私な、ずっと人が嫌いやった。でも、この学校に来て、好きになった。ここに来たら、みんなおるし」

それはよくわかる。ここはただの学校じゃない。家のような、巣のような、お母さんのよ

うな、お父さんのような。
「口だけじゃないなって思えるねん」
　それもわかる。ゆりは黙ってうなずいた。先生と生徒、クラスメイト同士、先輩と後輩。美保ちゃんとこんな話ができたのも、この学校に来たから。
「大丈夫やって」
　大丈夫だと思えた。
「ゆりちゃん、最近、勉強がんばってるやん」
「え……うん」
　見ていないようで、人のことをよく見ているのも、美保ちゃんらしいと思った。
「私な、専科コースの大人の人達が勉強してるのと一緒の試験を、受けてみたいねん。先生は難しいぞーって言うから、迷ってるねんけど」
　ゆり自身、まだ決心もついていないことを、美保ちゃんに話していることが不思議だった。
　美保ちゃんの目が子供のように笑った。
「それやっ！　ほら、できたやん、未来のこと！　それに向かって行ったら、悩んでる暇もないって」
　難しいみたいだから、諦めた方が良いかと思っていたのに。
　窓の外を見ると、月がはっきりと見えた。満月ではなく、少し欠けているように見えた。明るくて、周りのものの存在を全て吸い込んでしまうような月。ゆりの胸のあたりから、その月まで線路が伸びていき、列車の車輪が軋みながら動き出す音が聞こえた気がした。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。
　実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。